

4 焼津は今

第五福竜丸の母港・焼津。第五福竜丸が停泊していた岸壁を歩いてみた。一九五四年三月一日、死の灰をかぶって帰港した第五福竜丸の姿やビキニ事件で大ゆれになった焼津の港のことがよみがえってくる。

焼津では、飯塚利弘先生をはじめ社会科の先生方が、中・高校生と共に「ビキニ被災を学ぶ会」を開いてくれた。

第五福竜丸元無線長の久保山愛吉さんの奥さんのすずさん、焼津でマグロの放射能検査を担当した松岡先生、ビキニ調査船「俊こつ丸」「富士山丸」の調査に参加した焼津かつお・まぐろ研究所の本間さんの三人の方々に会うことができた。

焼津も第五福竜丸だけが被災船ではなかったのだ。この船だけにスポットがあてられたことが不幸であった。他の被災船員からねたみがおこる原因をつくってしまった。第五福竜丸の船員が語りたがらなかったのもそのためだ。しかし、今、第五福竜丸船員に年一回おこなわれていた放射能影響研究所の定期検診さえ打ちきられようとしている。彼らには、まだ「原爆手帳」さえわたされてないというのだ。すでに六名全員、肝臓障害でなくなっている。第五福竜丸事件もまだ終ってはいない。



◆久保山すずさんを訪ねて

一九八八年八月四日は静岡県焼津市へと場所をかえ、現地の中学生、高校生と合同学習をした後、久保山すずさんを五人ほどで訪ねてお話をうかがいました。まず、代表の五名が線香をあげさせてもらい、それからすずさんに過去を振り返ってもらいながら少しずつ話をしてもらいました。

「ふだんは元氣よく『ただいま』と帰ってくる愛吉さんが、何の言葉もなく、しかも裏口から入ってきて、顔は陽焼けとは違った浅黒い色で何かしら疲れきった感じだった」ということでした。

放射能に体をむしばまれ、衰弱の一途をたどりながら「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という言葉を残して死んでいった愛吉さんのことをかみしめるかのように語ってくれました。

愛吉さんの亡くなられた後は、子ども三人を女手ひとつで育てなければならず、大変苦労したそうです。国からの慰謝料もありましたが、家を一步出ると「あんたのそこはお金をたくさんもらってうらやましい」などの皮肉やいやがらせもたびたびあったそうです。そして、現在へとつながっているわけですが、すずさんは、愛吉さんのことについて、子どもや孫が聞きにくる時以外は、口に出さないそうです。なぜかという点、自分が今までそのことで苦しんできたから、子どもや孫に同じ思いをさせたくないから、ということでした。

僕たちは、このことを非常に残念に思います。二度とくり返してはいけない広島・長崎！くり返してしまつたビキニ水爆実験！その最初の犠牲者である愛吉さんのことは、当然語り継がねばならないし、僕たちにもその義務があり、権利があり、責任があると思う。すずさんも「マスコミに騒がれたくない、そつとしておいてほしい」という気持ちと、「原水爆のなくなる日まで、語り継いでいかななくてはならない」という相対する心情で、最近複雑な気持ちだそうです。

最後に、僕たちの平和活動について、という質問に対して「原水爆のなくなる日まで、世界の平和を目指し